琉球大学学術リポジトリ

「心の実験室」の全てを教えます：プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2018-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 道田, 泰司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41053

「心の実験室」の全てを教えます
―プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して―

教育学研究科（教職大学院）　道田泰司

2015 年度に開講した人文系科目「心の実験室」でプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞しました。この科目は 1992 年から担当しています。前後期とも開講していた時期もあるので，30 回ほど開いたでしょうか。受賞するのは４回目です。受賞者のノルマとしてこれまで，公開授業もやりましたし(2006/12/21)，第１回「プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー」シンポジウムで話題提供も行いましたし(2007/3/22)，大学教育センター報 16 号に寄稿も行いました(2013/8)ので，もうすることはないかなと思っていました。しかし，2016 年度から教職大学院に所属が変わり，もう共通教育の授業を持たないことになりました。受賞できるのも，寄稿できるのもこれで最後かもしれませんので，「この授業の全て」について，可能な限り書くことにしました。

1.　授業概要

この授業は，毎週，心理学と関連のある実験や体験活動を授業中に行い，翌週，Ａ４用紙１枚のレポートを出す，という形で行っています。講義科目ではなく実験中心の科目ですが，専門基礎科目などのように専門的な実験を行うことが目的ではなく，どの学部の学生でも楽しみながら心理学を学べるように，と思って授業を行ってきました。

心理学はこれとは別に，大人数の講義科目（心の科学，人間関係論）がありますので，その科目を補完する科目と位置付け，講義科目ではできないような「心理学の体験的理解」を目指しています。この授業で心理学に興味を持った人が講義科目を取ってくれるといいと思いますし，すでに講義科目を取った人はこの授業で心理学の理解がより深まるといいなと思っています。

2.　グループ学習

心理学を体験的に理解する（実験を行う）にあたっては，できるだけグループ学習・グループ実験の形になるようにしています。アクティブ・ラーニングです。グループを中心とした学習の進め方については，共同研究者として関わった琉球大学附属小学校，附属中学校での授業研究が大いに役立っています。

グループは，毎週ランダムに組み替えますので，授業を通して知り合いが増えることも期待しています。表だった目的としては掲げていませんが，グループワークを通して人間関係の学びにもなるといいなと思っています。

3.　１コマの組み立て

基本的には，90 分の授業時間中，半分ぐらいの時間（40～50 分）を実験に当てるようにしています。実験以外の時間については，実験前には，グループづくりや実験の説明を行っています。実験後には，心理学的な解説を行います。ただし説明は 10 分程度です。時間が短いのは，講義科目と棲み分けを行うためです。講義を通してではなく，「体験」を通して心理学が理解できることを目指しています。といっても心理学が「きちんと」理解できるよう，心理学概論書の見開き２ページ程度を必ず印刷配布し，それを用いて説明することで，いい加減な理解にならないようにしています。

なかには，もっと早く実験が終わってしまう場合もあります。たとえば「注意と妨害」というストループ効果の実験がそうです。この回は，実験終了後，何人かのデータを板書して，「４つある実験条件のうちどれとどれを比較したらいいと思うか」「この結果から何が言えるか」などを考えさせています。条件比較は小学校高学年の理科からやっているはずなのですが，案外的確な比較ができる学生はいないので，グループで相談させます。何人かの意見を聞いた上で，そこで出た誤解を踏まえながらこちらが説明をすると，説明の理解もより深まるだろうと考えてそうしています。

「この結果から何が言えるか」を考えさせると，レポートの「考察（データの解釈）欄」に，より適切なことがかけますので，考察が難しいデータの場合は，まずグループで考えさせ，それを発表させ，場合によっては考察の仕方のヒントを与えたりすると，より心理学に対する理解が深まるだろうと思います。

4.　実験内容の工夫

実験内容は，できるだけ心理学の幅広い分野に触れられるようにしています。知覚心理学（幾何学的錯視，注意と妨害），認知心理学（記憶術，ブレインストーミング，実験的思考），学習心理学（シェイピングゲーム），社会心理学（対人認知，集団決定，情報の伝達と変容），人格心理学（性格検査），臨床心理学（ブラインド・ウォーク），教育心理学（仮説実験授業，ジレンマ討論），などです。

最初の４回は，意図的に実験題目を設定しています。大教センター報 16 号にも書いていますが，ここでも紹介しておきます。初めての実験となる第２回は「記憶術」です。なるべく知らない者どうしで 10 名程度のグループになってもらい，グループメンバーの名前を「場所づけ法」という記憶テクニックを使って覚えよう，という実験です。第３回は「対人認知」の実験です。前週のグループをさらに３～４人のグループに分け，簡単な自己紹介でその人がどういう人かを推測してみよう，という実験です。最後の説明のところで，代表的な対人認知の歪み（ステレオタイプなど）を説明し，その言葉を使って自分の結果を解釈してみることが，レポートにおける考察になります。第４回はまたグループを組み替え，NASA 課題という集団意思決定課題を行っています。この３回で，受講生は，全体の 1/4 ほどの受講生の名前を覚え，１割ほどの人についてどんな人かを知り，さらに話し合って意思決定をすることになります。その後の授業も，できるだけ毎回，ランダムにグル

ープ編成をするようにすることで，いろいろな受講生と知り合い，学びあうことを意図しています。

5.　導入回の工夫

初回の授業も工夫しています（詳細は大学教育センター報 16 号に書きました)。簡単にいうと，受講生が間違った期待をもってこの授業を受講しないように工夫しています。具体的には，この授業の最重要ポイントを「契約条件」としてシラバスに明記するとともに初回に強調すること，前年度の受講者の授業感想（この授業はどんな人に向いているか）をシラバスに掲載すること，２回目以降の授業で行うようなグループワークを初回にも実施することで，授業の雰囲気を知ってもらうこと，などです。

6.　最終回の工夫

最終回の授業も工夫しています（詳細は大学教育センター報 16 号に書きました)。それは，授業評価をする際に，アンケートだけで終わらせるのではないということです。評価は対話の一環だと思っています。ですから，まずはいつもの授業のように，４人ぐらいのグループになってもらい,この授業のよかった点や改善すべき点を話し合ってもらいます。各グループとも，よかった点１点，改善すべき点１点を報告してもらいます（改善すべき点があまりたくさんあるとショックが大きいから，という理由も学生に伝えます)。改善すべき点を言いにくい場合は,「『……と誰かが言っていました』，とつけたらいいからね」と伝えています。それらはすべて板書し，私の方から，じゃあ次年度はこうしてみましょう，とか,このようにしたのはこういう意図があったのです,と説明をするようにしています。

匿名で一方的に書かれた（しかも時として何のことを指して書いているのか分かりにくい）授業評価アンケートの結果を見るだけでは，授業改善につながる情報は得にくいと思っていますが，こういうふうに授業評価を直接聞かせてもらい，こちらの考えも伝えるという対話の場を作ることで，授業をより良いものにしやすくなっていると感じています。

7.　レポートの工夫

この授業では毎回，A4 用紙１枚のレポートを課しています。レポート用紙は，書くべき内容（１．実験方法と結果，２．考察，３．考えたことや調べたこと）をあらかじめ記入したものを印刷配布しています。さらに，前年度の受講生が書いたレポートの中から最もよく書けていたもの１～２点を印刷配布しています。それを参考に，そのぐらいの分量は書いてね，という意図です。なかにはすごくうまく工夫してレポートを書く学生がいますので，そういうものを配布すると，あっという間にレポートのレベルは上がります。丸写しされては困るようなところは，一部を隠して配布することもありますが，しかし基本的には自分の実験結果とその解釈が中心になりますので，隠すことはあまりありません。

レポートの回収は，翌週の授業中に行いますが，そのときに，前週に提示したレポートの条件（必ず図を入れる，配布プリントの用語を必ず用いる，など）が満たされていなか

ったり，書く分量があまりにも少なかったりする場合は，レポートを受け取らないことにしています。これも数回繰り返すと，求める形と異なるレポートを書いたり，分量の少ない手抜きレポートを書いたりする学生はいなくなります。

レポートの条件のうち,「配布プリントの用語を必ず用いる」は，可能な限り課すようにしています。こうすると，実験後の説明もより真剣に聞くでしょうし，レポートを書きながら配布プリントを再度眺めることで学びも深まるでしょう。

ある年，実験には来るものの，レポートを全く出さず，最終回にまとめて出した学生がいました。そのレポートは，課題提示時に課した条件を満たしていないものだったので，その学生は不可とせざるを得ませんでした。そういうことがないよう，次の年からは，レポート提出が１週遅れるごとに１点減点することにしました。１点なので１週遅れぐらいではほとんど影響がありませんが，いくつも，何週も遅れると，確実に成績に響きますので，この制度を導入するようにしてからは，最後にまとめて出す，という学生はいなくなりました。

なお,レポートを集めるときには,できるだけ学生の名前を声に出すようにしています。ときどきは，軽く話しかけたりもします。そうすることで，授業者も受講生の名前をなんとなく覚えたりできますし，受講生も，授業（授業者）に対してより親しみをもって参加してくれるのではないかと思っています。

8.　毎年の工夫

実験の授業は，こちらが一方的にしゃべるだけの講義と違い，思わぬトラブルが起きることがあります。そういう大きなものではなくても，思っていたよりも時間がかかってしまったとか，実験のやり方を誤解して実験をしているグループがあったりすることはしょっちゅうです。そこで授業中，自分の授業ノートに時間をメモしたり（「何時までにここまで進まないと時間内に終わらない）みたいな感じで)，授業後すぐに，ここでこういう補足説明が必要，などのメモを授業ノートに書き込みます。翌年は，それを見ながら授業を進め，それでも問題があったらまたメモをすぐに書き込む，ということを何年か繰り返している間に，授業進行に関わるトラブルは激減しました。

またときどきは，学生の了解を得て，授業風景をビデオで録画します。録画した実験題目に関しては,研究室で弁当を食べながらそれを見返すことで,「そういえばここではこういうことを言うんだった」とか,「この説明はちょっと分かりにくそうなので少し変えてみよう」と，授業前に考えることができます。授業前にビデオを視聴する時間が取れないと活用できないですが，視聴する時間が取れるときは，とても役に立っています。

以上が私が 25 年かけて工夫してきたことです。なかには，この授業でないと生かせないものもありますが，実験の授業なら使えるものもあるでしょうし，どんな授業でもヒントになりそうなもの（グループ学習，初回の工夫，最終回の工夫，毎年の工夫あたり）もあるかと思います。参考になれば幸いです。